

6月は現代の国際社会における諸問題を議論する日仏シンポジウムや講演会が毎週のようにパリ日本文化会館で開催されました (No.25 および No.26 参照)。本号では、6月13日 (木) に開催されたシンポジウム「東アジアにおける漢文文化」についてご報告いたします。

目次

1. シンポジウム「東アジアにおける漢文文化」 2~6

東洋学と仏教学の権威ジャン＝ノエル・ロバール教授と国文学者ロバート・キャンベル国文学研究資料館館長ほか4人の学者が漢文文化圏に存在する共通項や問題等を議論しました。6月13日 (木) に開催。

① シンポジウム「東アジアにおける漢文文化」

2019年6月13日(木)に「東アジアにおける漢文文化」と題する講演会が開催されました。本講演会は11日(火)と12日(水)にコレージュ・ド・フランスで開催されたシンポジウムの延長上に企画されたものです。

ただ、このシンポジウムについては、筆者が3年前にフランスの東アジア文化研究者と意見交換した際に、日本、韓国、ベトナムなど東アジアの国々は古典中国から漢字を導入したが、今では各国における漢字教育の重みが減っており、昔に比べて東アジア諸国の意思疎通がうまくいなくなっているのではないかと、という問題意識から、それぞれの国の専門家が会してその問題を議論してはどうかという共通の認識に至りました。そこでコレージュ・ド・フランスの東洋学、仏教学の権威ジャン＝ノエル・ロベール教授に相談したところ、今回の企画が実現したという経緯があります。

パリ日本文化会館での3日目の登壇者は、ロベール先生に加え、人間文化研究機構・国文学研究資料館のロバート・キャンベル館長、および同資料館研究部のディディエ・ダヴァン准教授、パリ・ディドロ大学のヤニック・ブリュヌトン教授の4人です。講演会はキャンベル館長の基調講演から始まり、それに対してそれぞれがコメントを述べるという形で進みました。

キャンベル先生の一見漢文とは関係のないように思われる画家とその弟子を引き合いに出した江戸期の学びの姿勢を通じて、現代の教育、特に漢文教育の必要性を論じたプレゼンの仕方は見事でしたし、それに対するロベール先生の阿藤伯海という学者を引き合いに出したコメントその他、登壇者たちの日本に対する博識ぶりに感嘆させられました。漢文について外国人の碩学の4学者にご登壇いただいたことで、非常に刺激的で興味深い、説得力のあるシンポジウムになったと思います。

一部の国で言語表記の近代化、自国化によって漢文の影響が明示的でなくなった国もありますが、東アジア諸国の言語にいまも広範に漢字由来の言葉が使われています。漢字・漢文の重要性を改めて認識することは、東アジアの文化を奥深く豊かにするためにも、相互理解を深めるためにも、有効で意義深いことだと、本講演会を通して感じました。

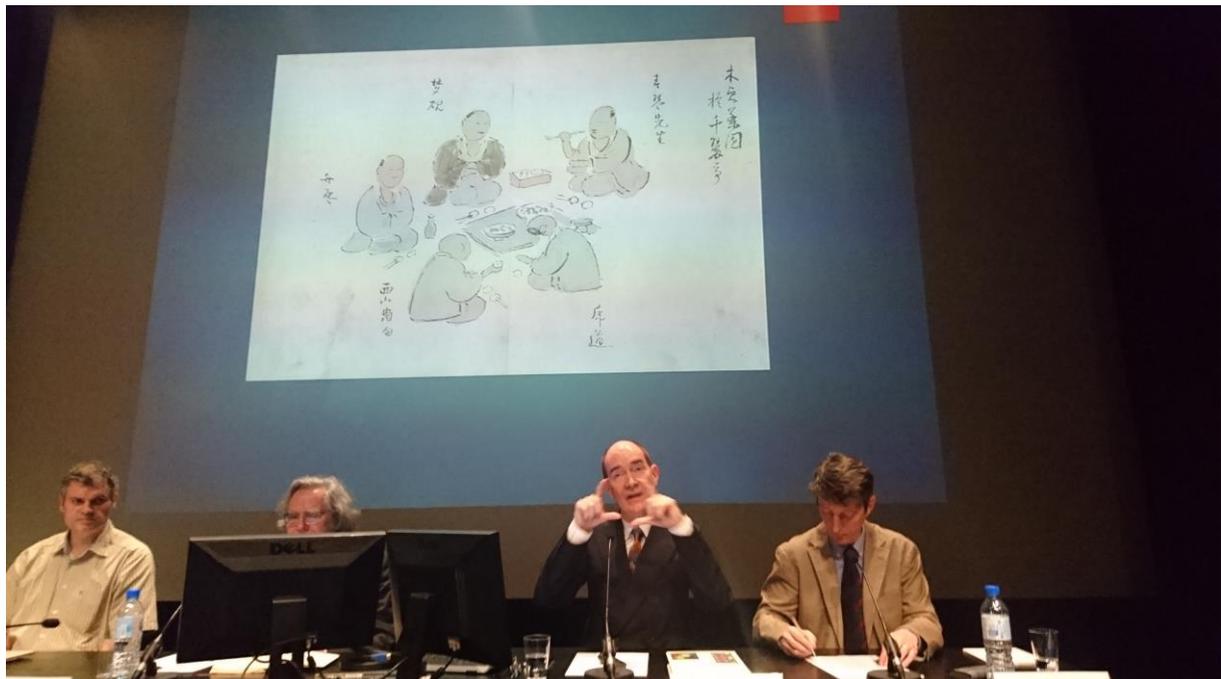
以下、講演会の概要をお伝えします。

〇ロバート・キャンベル館長の基調講演

キャンベルさんは「前近代の日本では、なにかを学ぶことと、なにかを創ること、そしてそれを伝えることは一連なるのこととして考えられ、その場が欧米のように個人によって成り立つのではなく、集団を前提としてあり、その場が文化を支えるものとして社会の中で高い位置付けを与えられていた」と述べ、江戸時代の教えと学びについて、画家の浦上春琴とその弟子の馬場竹琴との師弟関係を、絵に描かれた学びの場面を披露しながらユーモアを交えて解説しました。

馬場竹琴は廻船問屋が集まる裕福な文化町であった尾道に生まれ暮らした画家でしたが、京都から尾道にやってくる文化人たちについて、誰と会い、誰と話し、何をしたかを記録した絵日記『雅会小録』(1822)を残しています。ほとんど漢字で、ところどころ仮名が入っている非常に簡潔な記録です。その中に著名な文人画家の浦上春琴が文政5年10月15日から21日まで尾道の玉浦寓居に滞在し、絵を制作したり、若者たちに絵の手ほどきをしたりした時の描写があります。そこには先生と町の富裕者と若者たちが集まって、歓談している場面が描かれています。

どの場面も飲んだり、食べたり、団欒したり、が描かれており、いつ勉強しているのかと思うくらいですが、日本では「警咳(けいがい)に接する」と言いますか、まず先生の言葉を無心に聴く、そこにいる商人や武家の人たちの話を聞く、そうしたことを通じていろいろなことを学んでいきます。



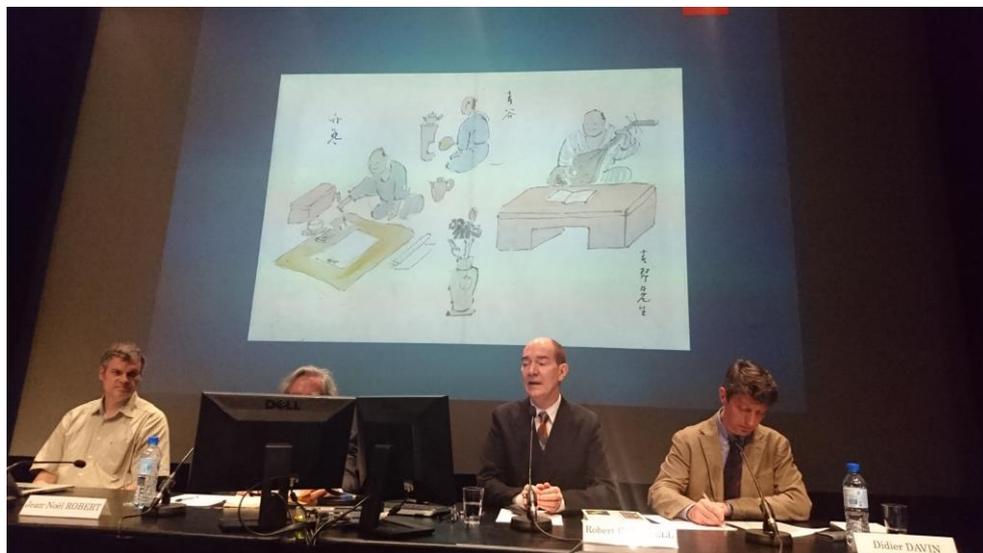
講演するキャンベル館長（左から3人目、キャンベル館長を挟んで左からブリュヌトン、ロバール、ダヴァンの各氏）

春琴先生は尾道だけではなく、若者たちを京都に招き入れ、いろいろな見聞を広めさせています。そこには頼山陽も誘い、京都の渡月橋を渡って嵐山に花見に連れて行く。いまの大学では翌日すぐ新聞沙汰になってしまうかもしれませんが、弟子の竹琴は酒がいっぱい入った瓢箪を持っています。こうしたところにも、この頃の個ではなく集団で学ぶ姿勢が窺われます。



「京都の渡月橋を渡って嵐山に花見に...」

最後に例示する絵は、浦上春琴先生が再び尾道に来たときのものです。ずいぶん打ち解けた様子に見えます。竹琴は先生にお酒を注ぐ存在から、実際に絵筆をもって先生の前で絵を描いています。ここまで来ると竹琴の成長の過程が見て取ることができます。先生は中国の弦楽器を弾きながら明朝や清朝の音楽を奏でていました。長く東大で教えてきた自分としてはこの絵を見ると忸怩たる思いがします。



絵筆をもって先生の前で絵を描く竹琴の図

つまり、生徒が学んだことを身につけ、創作している姿を、先生が後ろから見るともなく見守る。江戸時代の学びの場のゆるやかな文化共同体を表したもので、すばらしい伝承の姿だと思います。そしてその教えの場には常に漢文、漢文学があったのです。

少し話題がそれますが、江戸時代に豊後国日田郡堀田村（現大分県日田市）に廣瀬淡窓という学者が主宰している咸宜園（かんぎえん）という全寮制の学校がありましたが、そこでは若者たちが共同生活をしながら漢文、漢詩を習っています。

いろいろな地方から集まった若者たちなので、時に喧嘩や紛争が起こりますが、先生はその都度七言絶句の漢詩をつくって生徒たちに諭します。「君たちには十分な衣服があって、あるものは川に水を汲みに行き、あるものは里山に行って薪を拾ってくる、それでいいではないか。」というような漢詩を示すのです。ここでも漢文が重要な役割を担っています。

○ジャン＝ノエル・ロベール教授のコメント

「戦前最後の漢詩人、阿藤伯海（はくみ）（1894–1965）という東大教授は 1944 年に 51 歳で東大をやめ、（その後 21 年間、）故郷（の岡山の浅口郡六条院村相部（現在の浅口市鴨方町））に帰って個として厭世の漢詩を作って過ごしました（没後、漢詩集『大簡詩草』が刊行されています）。彼は共同体世代の最後の漢学者でした。

「漢字は（西洋哲学の概念等を表記するなどの）日本の近代化に際しての言葉づくりに多大な影響を与えました。そしてそれが中国や韓国等にも採用されたという意味で、非常に象徴的です。英語はラテンとゲルマンの両言語から言葉が構成されているので、非常にリッチな語彙を持っています。例えば、liberty と freedom のように、一つの意味に二つの単語がある。日本や韓国、ベトナムも同じように中国から漢字を取り入れ、非常に豊富な語彙をもっています。

「フランスではモンテーニュやラブレールなどの文章が今の学生でも比較的容易に理解できますが、日本や韓国では、戦後になって正字法が変わったり、漢文を習わなくなったりしたので、前時代と断絶ができ、今の学生たちには夏目漱石や森鷗外、幸田露伴など近代の文章を読むのさえ困難になっています。また、戦前にあった、漢文から国文への移行に寄与した訓読（lecture explicative）もなくなってしまいました。戦前には（知識人の間では）中国語が自由に使えたのです（disponibilité totale de la langue chinoise）。

「こうした断絶は日本文化を理解する上でも非常に残念なことであるだけでなく東アジアにおける相互理解を深めるためにも非常に残念なことです。例えば四字熟語などは東アジアでの共通語でしたが、今の日本では四字熟語を使う頻度がますます減ってきています。17 世紀に秀吉によって捕らえられた朝鮮儒者・姜沆（かんこう）と藤原惺窩（せいかわ）が漢文で筆談した話は有名です。自国の文化を理解し、豊かにするためにも、東アジア圏のコミュニケーション向上のためにも、現在の教育システムにこうした漢文の素養をどのように組み込むかは、キャンベル先生も指摘されたように非常に重要なことだと思います。」

○ヤニック・ブリュヌトン教授のコメント

ブリュヌトンさんはロベールさんの発言を受けて、漢文の社交性について話しました。「日本同様、韓国でも 1895 年の勅令で世代間の断絶ができました。公的な文書は古典漢文ではなく、15 世紀半ばにできたハングル文字で行うという勅令です。とはいえ、いま韓国で東洋医学や文学、歴史を専攻する人たちは、2000 字程度の漢字を学ぶ必要がある。私自身大学で韓国語を習っている学生に対して、漢字を覚えるように勧めています。それによって 19 世紀半ば以前の文化の理解に役立ち、学生たちの学問的展望が格段に拓けるからです。」

○ディディエ・ダヴァン准教授のコメント

「日本の学生にとって漢文はマジックあるいはボーナス、宝のようなもので、中国語を学ぶとき、我々ヨーロッパ人に比べて非常に有利な位置にあります。また、漢文を日本風に訳した訓読は非常にすばらしい。『三国志』のマンガでも重要なシーンには訓読文が使われているくらいです。訓読は漢文の特殊性を残しながらその理解をも容易にしています。1970—80 年代以降の教育では訓読ではなく現代中国語で漢文を読むようになってしまいました。それは非常に残念なことです。それまでの世代は、中国語は話せないが訓読で漢文を勉強し、非常に高度な研究成果を出しています。」

○ロバート・キャンベル館長のコメント

「私は 10 年ごとに行われる日本の文部科学省の学生指導要領の刷新をする中央教育審議会の委員になっています。ちょうど今年から新しい指導要領が採用されますが、その中の重要な一つの支柱としてあるのが、アクティブ・ラーニングです。それぞれの教科が個別に確立してあるだけではなく、文系も理系もお互いの分野の中で、相互的な学習ができるように、教科書やカリキュラムを考えるとということ、単に知識を詰め込むだけでなく教科書以外の教材を使ったり、フィールドに出て学び発表しお互いに批評したり、そういった教育を醸成するための大綱を作りました。」

「その中で私がワーキンググループを作って提言し、採用されたものに、言語活動の向上があります。口語も文語も一つの言語活動としてとらえて、お互いにつなげられるところはつなげていこうという提案です。その中で重要な核となっているのが漢文です。漢文を訓読、訳読することは、一つには他文化への窓になるということであり、同時に元の言語に近づいていく、私はそれを同期すると言っています。元の言語の中で自ら思考することができ、情操や思考の育成に役立ち、そのような思考を他の分野に結びつけることができます。非常に有用です。理系の学生が漢文に非常に強いということが私の東京大学での経験でもわかっています。それぞれの学校の裁量の中で他の分野への教育に活用していくことが望まれます。」

○ジャン＝ノエル・ロベール教授

「素晴らしい提言ですね。フランスでもラテン語教育に取り入れてほしいものです。」(拍手)

以上